

沿岸イワシ類資源有効利用調査

(第2県土水産資源調査)

佐々木正・村山達朗

1. 研究目的

平成14～16年にかけて行った沿岸漁業実態調査の結果、本県沿岸漁業の複合経営を進めるためには、冬から春に操業可能な漁法の導入とイワシ類の資源動向の把握とその有効利用にあることが示唆された。そこで、イワシ類幼魚（以下「シラス」と称す）を対象とした知事許可漁業（すくい網漁業や船びき網漁業）がありながら、近年ほとんど操業実績のない石見東部海域において、シラスを対象とした漁業の再構築の可能性を探るため、シラスの分布実態調査と5トン程度の小型船1隻でも操業可能な船びき網漁法の開発を行う。

2. 研究方法

本年度はシラスの分布量と季節変化を把握するために江川河口周辺において調査定線を設定、試験船「明風」により魚群探知機を用いて調査を実施した。シラスとその他の魚種の魚群の反応の区別は高周波および

低周波における反応の違いにより判断した。

3. 研究結果

シラスの魚群探索調査結果（図1）では、シラス魚群の密度は4月と11月に高まる傾向を示した。これらの調査から、江川河口周辺海域ではシラス資源が春季および秋季に利用できる可能性が示唆された。

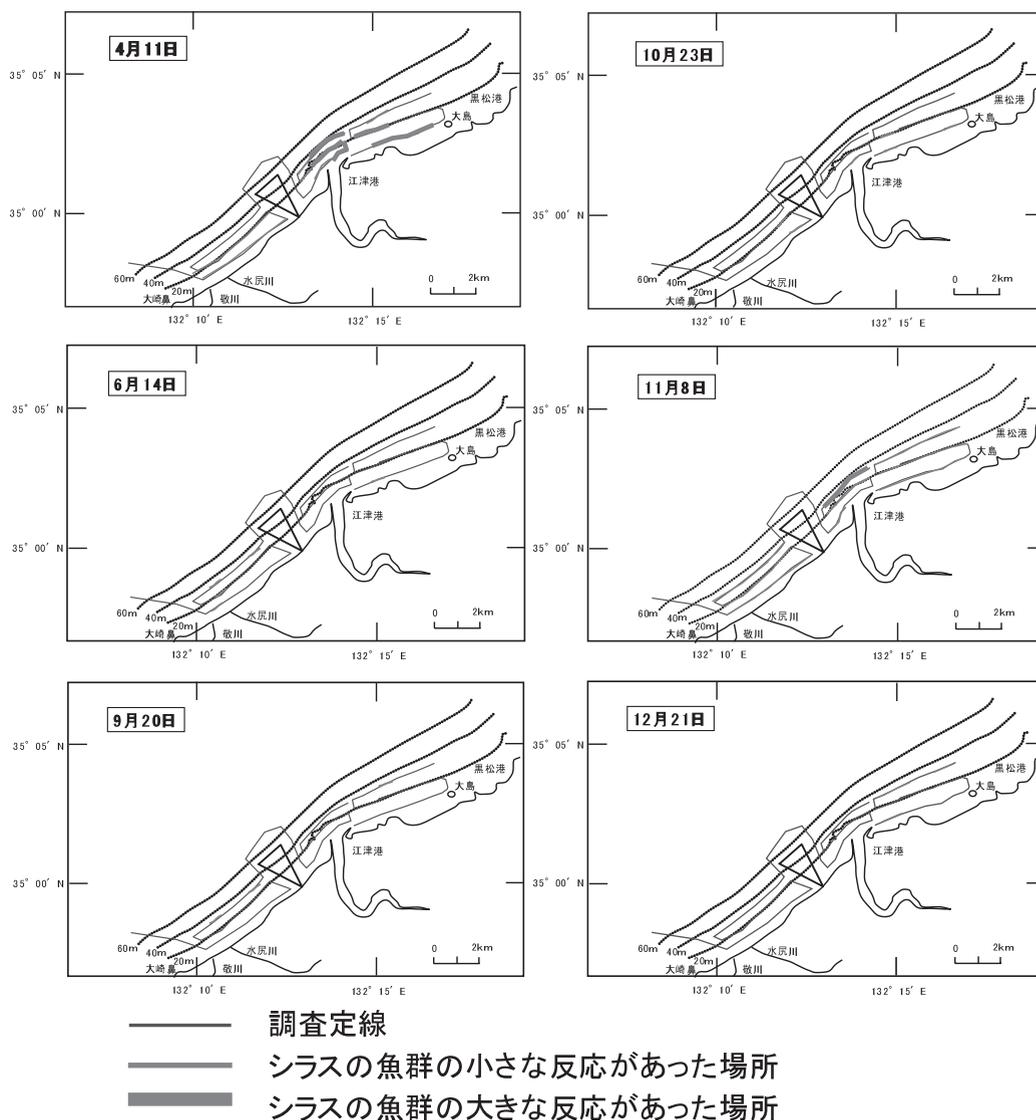


図1 試験船「明風」によるシラスの魚群探索調査結果